

# 大石寺藏日興写本の研究

小林 正博

## はじめに

本稿は、古文書の文字分析を主眼においた研究である。具体的には字体・字形対照を基本とする研究方法に依って立っている。取り上げる文書は、日蓮の直弟子日興の筆とされる一連の日興文書である。

幸い日興の筆跡については写真集の発刊によって十分な研究材料が提供されている。すなわち『日興上人全集』（興風談所 一九九六年）と『富士大石寺藏日興上人御筆 日蓮大聖人御書』（コピー版・妙真寺発行 一九八七年）の二冊の写真集である。特に後者は大石寺に伝わる日蓮文書の書写本として三一編を収め、日蓮文書集の本文校訂には欠かせない重書である。日興による日蓮文書の書写の数は、直孫弟子の中で群を抜いていることは周知の通りである。その全容を示すと次のようになる（文書の番号は『昭和定本日蓮聖人遺文』の遺文番号を示す。以下「昭定」と略す）。

北山本門寺藏 38「南条兵衛七郎殿御書」 112「四条金吾殿返事」 127「波木井三郎殿返事」 181「撰時

抄」 184「浄蓮房御書」 249「頼基陳状」 260「兵衛志殿御返事」 271「実相寺御書」 275

「三沢抄」 306「上野殿御返事」 308「本尊問答抄」 342「伯耆殿御書」 344「伯耆殿御返

事」 346「変毒為藥御書」 408「曾谷二郎入道殿御報」 図30「一代五時鶏図」

玉沢妙法華経寺蔵 24「立正安国論」

京都要法寺蔵 118「観心本尊抄」

静岡大泉寺蔵 308「本尊問答抄」(ただし断簡)

富士大石寺蔵 145「法華取要抄」 252「上野殿御返事」 372「上野殿御返事」 図20「一代五時鶏図」

『富士大石寺蔵日興上人御筆 日蓮大聖人御書』所収の三一編

153・177・246・276・282・314・338・350・357・377・394・402「上野殿御返事」 185・206

「南条殿御返事」 189「高橋殿御返事」 187「高橋入道殿御返事」 191・192・365「妙心尼御

前御返事」 292「南条殿女房御返事」 288・297・323・356・369・420「窪尼御前御返事」

299「種植物御消息」 300「時光殿御返事」 349「持妙尼御前御返事」 422「西山殿後家尼御

前御返事」 429「法華証明抄」

その他、「唱法華題目抄」があるがこれは日蓮真蹟「南条兵衛七郎殿御書」の行間に書き込まれたものである。

以上確実な日興写本の数はいくつあるか(308と図20の二編重複により実質は五三編<sup>1)</sup>。

こうして見ると日興写本は北山本門寺(一六編)と富士大石寺(三五編)に集中していることがわかる。そしてその中でも大石寺蔵の三一編の日興写本は、全体の六割近くを占めており、その書写の精度は極めて高く、師の教えを忠実に伝え、後学のために師の遺志を遺そうとする直弟子・日興の偉大な業績の一つといっても過言ではない。しかし、その筆跡を精査していくと字体・字形について看過しえない問題点が浮き上がってくる。

【一】大石寺蔵日興写本は、はたして日興筆なのか

まず『日興上人全集』と『富士大石寺藏日興上人御筆 日蓮大聖人御書』で使用される仮名の一覧を作成した。  
 ①は『日興上人全集』五〇八頁から五八四頁の消息写真と同四一六頁から四五八頁の「法門要文」と「玄義集要文」の写真から抽出した日興仮名であり、②は『富士大石寺藏日興上人御筆 日蓮大聖人御書』一頁から八九頁の三一書の消息写真からの抽出である。

①『日興上人全集』

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| あ | い | う | え | お | か | き | く | け | こ | さ | し | す | せ | そ | ち |
|   |   |   | 江 | お | か | き | く | け | こ | さ | し | す | せ | そ | ち |
|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| つ | て | と | な | に | ぬ | ね | の | は | ひ | ふ | へ | ほ | ま | み | む | め |
| つ | て | と | な | に | ぬ | ね | の | は | ひ | ふ | へ | ほ | ま | み | む | め |
| め | え | い | あ | よ | り | わ | れ | え | は | ふ | へ | ほ | ま | み | む | め |

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| も | ゆ | よ | ら | り | る | ろ | わ | わ | を | ん |
| も | ゆ | よ | ら | り | る | ろ | わ | わ | を | ん |
|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |

②『富士大石寺藏日興上人御筆 日蓮大聖人御書』

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| あ | い | う | え | お | か | き | く | け | こ | さ | し | す | せ | そ | ち |
| あ | い | う | え | お | か | き | く | け | こ | さ | し | す | せ | そ | ち |
|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| つ | て | と | な | に | ぬ | ね | の | は | ひ | ふ | へ | ほ | ま | み | む | め |
| つ | て | と | な | に | ぬ | ね | の | は | ひ | ふ | へ | ほ | ま | み | む | め |
| め | え | い | あ | よ | り | わ | れ | え | は | ふ | へ | ほ | ま | み | む | め |

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| も | ゆ | よ | ら | り | る | ろ | わ | わ | を | ん |
| も | ゆ | よ | ら | り | る | ろ | わ | わ | を | ん |
|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |

①と②に大別した理由は、②の日興写本の字体・字形が①と相違しているような気がしたからである。その第一印象の適否を検討するために、この一覧表を作成したのだが、確かに使用仮名の相違が浮き彫りになっている。①にあつて②にない仮名は「ㇿ」(か)「ㇾ」(す)「ㇼ」(に)「ㇽ」(た)「ㇺ」(た)「ㇻ」(み)「ㇼ」(る)の七字、それに対して②にあつて①にないのは「ㇼ」(あ)「ㇽ」(き)「ㇾ」(け)「ㇺ」(す)「ㇻ」(せ)「ㇼ」(そ)「ㇽ」(た)「ㇺ」(も)「ㇻ」(も)「ㇼ」(ら)「ㇽ」(る)「ㇺ」(る)「ㇻ」(る)「ㇼ」(わ)の十三字ある。ここまでは使用仮名の字体比較法による成果の提示ということになる。

次の段階は字形対照の作業である。その方法は写真の切り貼りを掲示するのが一番よい。

そこで、より確実な判断につながるように大石寺蔵『日興上人全集』についても(1)消息写真と、(2)「法門要文」、  
「玄義集要文」に分けて仮名写真の抽出を行なった。(3)は日興写本のかな写真である。写真下の数字は、『日  
興上人全集』の頁、(3)は『富士大石寺蔵日興上人御筆 日蓮大聖人御書』の頁を示している。

(1) 消息の仮名

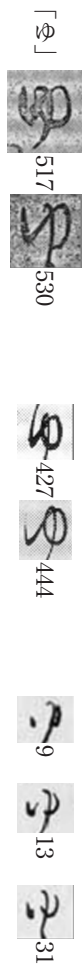
(2) 要文等の仮名

(3) 写本の仮名

|     |  |     |  |     |     |  |   |  |   |  |    |
|-----|--|-----|--|-----|-----|--|---|--|---|--|----|
| 「た」 |  | 516 |  | 417 | 427 |  | 1 |  | 6 |  | 19 |
|-----|--|-----|--|-----|-----|--|---|--|---|--|----|

|     |  |     |  |     |     |  |   |  |    |  |    |
|-----|--|-----|--|-----|-----|--|---|--|----|--|----|
| 「な」 |  | 516 |  | 427 | 453 |  | 1 |  | 51 |  | 71 |
|-----|--|-----|--|-----|-----|--|---|--|----|--|----|

|     |  |     |  |     |     |  |   |  |    |  |    |
|-----|--|-----|--|-----|-----|--|---|--|----|--|----|
| 「ね」 |  | 513 |  | 417 | 428 |  | 5 |  | 31 |  | 31 |
|-----|--|-----|--|-----|-----|--|---|--|----|--|----|

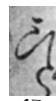


これらの仮名写真は基本的に最も出現率の高い標準的な字形を選んで作成している。こうして一覧にしてみると、(1)と(2)は酷似しているが(3)の字形とは明らかに違っていることに気がつく。(1)と(2)は日興筆であることは確実なので、日興の仮名書きの筆癖が一覧できるものとなっている。ところがこれと比べて(3)は別人筆と言いつけるほどの違いがある。特に相違が著しいのは「た」の始筆、「ほ」の右部分、「め」の右上の曲がる向き、「ゆ」の中央の縦線の長さ、「り」の終筆、「れ」の終筆である。

次のように二文字以上の言葉で比較しても同じ結果が導かれる。

「まいらせ」

(1) 消息



512

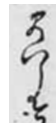


513



524

(3) 写本



6



12



25

「おほせ・おほく」

(1) 消息



516



530



428

(2) 要文等の仮名

(3) 写本の仮名



8



26



33



43

「まいらせ」は、(1) 消息では活字表記で「まいせ」となっているが、(3) 写本では四二箇所すべてが「まいらせ」と書いている。「おほ」では「ほ」の字形がまったく違っている。

この段階までの分析によって「日興写本は本当に日興の筆なのか」という疑いが強くなっていった。もしそうなら昭定の目次にある「古写本」の項目に記される「日興筆」は、三一箇所亘って削除されなければならない。これは通説を覆すほど事が重大なだけに対照作業を止めずにさらに漢字にまで踏み込むことにした。

「聖人」

(1) 消息



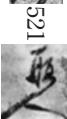
508



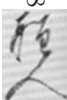
514



521



528



538

(3) 写本



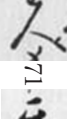
49



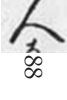
50



70



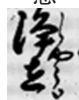
71



88

「土」

(1) 消息



420



421



423



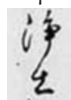
452

(2) 要文等の仮名



561

(3) 写本



15



37



53



75



4

もっと多くの漢字の字形対照を試みたが、「聖人」と「土」の文字の相違が浮き上がっただけで、他に別人筆を確実にするものが見つからず「非日興写本」と断定する材料の提示は、ここまでが限界であった。しかし字形対照による成果の一端がある程度提示することができた。とはいえ、字形対照法は活字比較法より、はるかに困難な作業が要求される。それこそすべての字形をチェックしなければ正確な成果は望むべくもない。

実はこれらの作業中、不都合な写真例が多く存在し、合理的に処理することが筆者に科せられた課題となった。それは(1)消息や(2)要文等を収める『日興全集』から(3)写本の仮名を収める「大石寺藏日興写本」の字形が存在し、またその逆もあることが判明してきたのである。

その例外的実例を列記すれば次のようになる。

(3)の写本に見られる(1)(2)と酷似する字形

「な」



5



29

「り」



27

「れ」



2

「土」



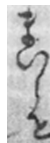
8



31

(1) 消息 (2) 要文等に見られる (3) と酷似する文字

「まいらせ」 564 「おほ」



564



565



565

「土」 368



462



470



「聖」 368



479



545



548



577



これらの写真が伝えてくれることは、日興の消息と要文集等の文字と日興写本の文字が別筆とみまがうほどの違いがあることは事実であるが、大石寺蔵の三一編の「日興写本」を「非日興写本」と断定することの危険性である。その理由は、一つに両者を取り結ぶ共通の筆跡が例外的に存在していること、二つに日興写本を非日興筆と断定すると他の日興文書も非日興筆となってしまうことにある。

後者の理由に該当する日興の文書は、次の七書で、「聖」と「土」が大石寺蔵の「日興写本」と同じ字形となっているものである。

「安国論問答」(『日興上人全集』三頁)

富士大石寺蔵

年次不明

「実相寺衆徒愁状」(同九三頁)

北山本門寺蔵

文永五(一二六八)年

「実相寺住僧等申状」(同一〇九頁)

北山本門寺蔵

文永六(一二六九)年

「宗祖御遷化記録」(同一二頁)

西山本門寺蔵

弘安五(一二八二)年

「曾祢殿御返事」(同二〇〇頁)

保田妙本寺蔵

年次不明



「曾祿殿御返事」(同二〇三頁)

保田妙本寺藏

年次不明

「つばねの御消息」(同二四四頁)

富士大石寺藏

年次不明

この七書は「日興写本」の「非日興説」を否定する根拠として立ちはだかっているのである。

しかしこれらに、ある共通点が浮かび上がってくることがわかる。述作年代のはっきりしている三書はいずれも日興の青年期のものである。

そこで筆者は、大石寺藏日興写本を日興筆であるためには以下のような仮説を立てざるを得ないと考ええる。

これら七書と「日興写本」は日興筆と認めた上で、それ以外の「日興消息」「日興の要文集」等の著しい相違の理由を、日興の生涯における青・壮年期と晩年期の筆跡の変化によるものと分けることである。「聖」や「土」が変化する初見は永仁六年(一二九八年)の「弟子分本尊目録」である。<sup>(6)</sup> 奇しくも永仁六年は日興が大石寺から重須の北山本門寺に移住した年に当たる<sup>(7)</sup>。

したがって三一編の写本は大石寺に在住していたころ、すなわち一二九八年以前の書写であると想定したのである。「日興写本」が大石寺藏であることもそのことを後押しする理由である。一方北山に移り以後三二年間、逝去までの晩年期において筆跡が変わり、それが要文集や消息の文字に現われることになったと考えれば整合性が図れる。

以上、二つの相違する筆跡を日興一人による筆とする合理的説明として、青・壮年期と晩年期での筆跡変化ととらえるのが現時点における筆者の仮説である。結論とせず仮説としたのは、ある年を境に筆跡が急変することに対する不自然さを払拭しきれないが故である。

【二】 伝日目写本「法華題目抄」は「日興写本」と同筆

実は、この紆余曲折の作業が思わぬ発見へとつながっていった。

「日興写本」と同筆の文書に出会うことができたのである。それは日目写本とされる「法華題目抄」である。筆者の所持する「法華題目抄」は写真のコピー版であるが文字は比較的鮮明であり、写真対照には十分耐えられるものである。なお昭定では、「法華題目抄」の目次の古写本欄にも本文題号の脚注にも日目写本の記述はない。<sup>(8)</sup>

そこに綴られている文字は、まさしく「日興写本」の文字と一致するのである。写真で比較しながらそのことを確認していく。

日興写本と伝日目写本「法華題目抄」の文字対照

③「日興写本」

④「伝日目写本 法華題目抄」 数字はコピー版の丁数

〈仮名〉

「た」  
  


 1  
 2  
 15

「つ」  
  


 1  
 15  
 22

「な」  
  


 11  
 14  
 16

「ね」  
  


 14  
 14  
 16

「め」  
  

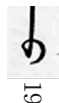
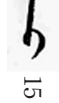

 6  
 6  
 7

〈漢字〉

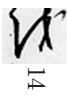
「ゆ」



「り」



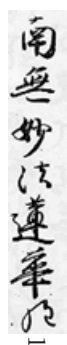
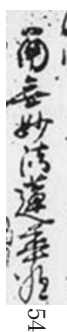
「を」



③ 「日興写本」

④ 「伝日写本 法華題目抄」

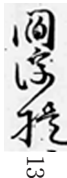
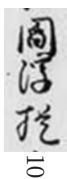
「南無妙法蓮華經」



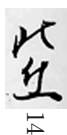
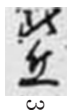
「阿鼻大城」



「閻浮提」



「比丘」



「疑」



「はかり」



15

「おほえ」



26

「なり」



9

「ゆへ」



9

単語や漢字で比較してもその一致は明らかである。これで疑いなく「日興写本」と「伝日目写本 法華題目抄」が同人筆であることは確実になったと考える。

ではだれの筆に比定されるのか。それを解く鍵は「伝日目写本 法華題目抄」の第二四紙目の奥書の文字にある（写真参照）。



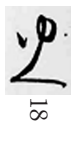
2



3

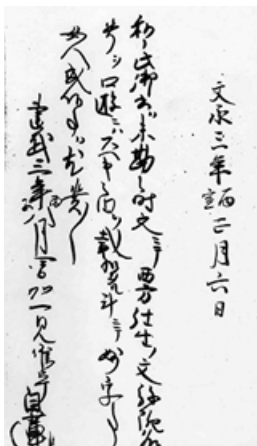


18



18

文永三年丙寅二月六日



文永三年丙寅正月六日

私云此御書ハ未勘之時文ニテ西方往生ノ文弥陀名  
号ヲ口遊ニハスヘキ之由ヲ載給タル斗ニテ妙字事  
女人成仏事ハ尤貴尤貴

建武三年丙子八月四日加一見候畢 白蓮

ここでは、日興の弟子の一人であろう白蓮という僧が、「法華題目抄」に対する所感を記している。その奥書の趣意は「文永三年の法華題目抄述作の時点では、まだ日蓮の法門は未成熟であり、かつて念仏の西方極楽浄土への往生の文や阿弥陀仏の称名念仏に引きづられていたことを述懐しているが、本抄で妙の字義や女人成仏のことが記されていることは大変に貴いものである」との謂いであろう。

そしてこの奥書で着目すべきは「建武三年」にある。西暦では一三三五年だから日興、日目の寂後わずか二年の段階である。これが确实であればこの写本の文献的価値は、たとえ日興や日目による書写本でなくとも大きくそなわれることはない。

建武三年（一三三三年）筆の奥書であることを立証するには、同じ第二四紙に書かれている「文永三年丙寅正月六日」が「伝日目写本 法華題目抄」を記した本人の筆であることが前提条件となる。つまり写本者の筆と白蓮の二人の文字が同紙上にあるなら、この写本の成立が建武三年以前と確定できるからである。写真対照してみると次のようになった。

「文永三年丙寅正月六日」の文字 ④「伝日目写本 法華題目抄」の文字

文 永 年

文 永 年  
7 12 6

二

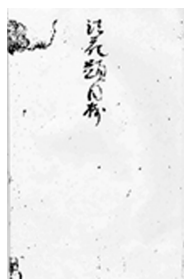
月

六日

二<sub>7</sub>月<sub>11</sub>六<sub>12</sub>日<sub>7</sub>

文字数が少ない難点はあるが、同人筆であるとの結論は出せると考える。

さらにだめ押しで言えば「伝日目写本 法華題目抄」は表紙が付いており（左上写真、奥下に「日目」と記されているので、日目の所持本であったことが窺われる。

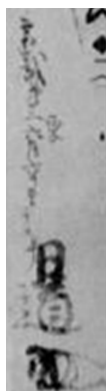


下の写真は「一代聖教大意」の日目写本の表紙である。奥下の「日目之」の文字は「伝日目写本 法華題目抄」表紙の「日目」と同筆と見て良い。「一代聖教大意」の方は識語に日目が「日蓮聖人之御自筆ノ本ニテ書写之」と記しているから日目写本であることはまちがいない。「伝日目写本 法華題目抄」表紙の文字も七文字しか書かれていないので、写真対照で日目筆と断定するのは困難だが、「一代聖教大意」の表紙の書き様との類似性から日目の文字である可能性が高い。おそらく日目滅後、これを白蓮が受け継いだのであろう。

さて、もう一つの問題は、白蓮とは一体だれのことかである。

そもそも「白蓮」という房号は日興が日蓮からもらったものである。その房号を自称して憚らない「伝日目写本法華題目抄」の奥書の筆者は、日興門下でも正嫡に価するような有力な僧であると考えられる。白蓮について大石寺発行の『日興上人 日目上人正伝』（一九八二年）では、大石寺四世の日道に比定している。「日道上人は伊豆島郷新田家の出身で、五郎二郎頼綱の次男であり、日目上人の甥に当る。弘安六年の出生で、始めは日目上人を師として出家し、後に重須の日興上人に仕えて修学、白蓮房とも伯耆房とも言われ、日興上人の房号を頂戴している。」<sup>(9)</sup>という。伯耆阿闍梨と称したことは、日道が日興から与えられた「弁阿闍梨御返事」の奥に「伯耆阿闍梨改名了 日道<sup>(10)</sup>と記しているから根拠は明確である。しかし日道≡白蓮の根拠を筆者は知らない。「伝日目写本 法華題目抄」の奥書の日付は建武三年八月四日になっているが、わずかに二ヶ月違いの日道の筆が日蓮真蹟の「諫曉八幡抄」の末に記されている。二つの写真を並べておく。

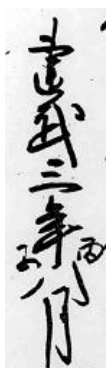
「建武第三丙子六月六日□□奉畢 日道 花押」



「諫曉八幡抄奥」真蹟集成9巻129頁

「建武第三丙子八月」

「白蓮」



「伝日目写本 法華題目抄奥書」

写真も不鮮明で判断材料としては心もとないが、白蓮を日道と同一人物と判定できる文字の酷似性を見出すことは

できない。

## 【結】

以上種々議論してきたことを簡条書きにしてまとめ、本稿の小結としたい。

### 「大石寺藏日興写本」について

一、確実な日興の文字と比較すると別人である可能性をぬぐいきれない。

一、しかし日興筆でないとしても、真蹟からの第一転本であり、書写の精度もきわめて高く、真蹟に準じる第一級の資料であることは動かない。

一、日興筆であるとするならば、晩年の筆跡との相違を鑑みて、日興の青・壮年期の文字とすることで整合性を図らねばならない。

### 「伝日目写本 法華題目抄」について

一、日目の書写ではなく、まさに「日興写本」と同筆である。そしてその書写年代も「日興写本」とほぼ同時期すなわち一二九八年以前である。

一、「伝日目写本 法華題目抄」には白蓮なる日興の弟子による奥書が記されており、白蓮が大石寺四世の日道という可能性もあるが、現段階では保留せざるをえない。

## 〈注〉

(1) その他『日興上人全集』では日興写本が存在するという文書がある。筆者が直接確認できないためここに留記しておく。

186 「大学三郎殿御返事」北山本門寺藏

202 「上野殿御消息」大石寺藏



(2) 日興写本の精度の高さは次の事例でも立証される。「上野殿御返事」第一紙(「日蓮大聖人真蹟集成」九卷六六頁)の本文に

相当する部分は「日興写本」(富士大石寺藏日興上人御筆 日蓮大聖人御書)四三頁と『刊本録内御書』(三三卷一五頁)にも収められており、真蹟と「日興写本」と刊本録内の三者の対照が可能である。

それぞれの使用文字数を一覧化すると明確に「かなの漢字化」が浮き彫りになってくる。特に刊本録内の当該箇所を真蹟と対照させると、著しい漢字化が一目瞭然となる。

真蹟一紙分の「かな」の漢字化(数字は使用文字数)

|    | 真蹟        | 日興写本      | 刊本録内御書    |
|----|-----------|-----------|-----------|
| 漢字 | 三〇(二二・三%) | 三三(二六・〇%) | 五八(五五・八%) |
| かな | 一〇四       | 九六        | 四六        |
| 計  | 一三四       | 一二九       | 一〇四       |

もし真蹟も日興写本もなければ、この南条時光への消息は半分以上漢字で書かれたものとして伝わったであろう。

(3) 「ぢ」の字源は「当」である。写真で示せば  であり、「堂」が字源のように見える。しかし、日興写本では「別当」

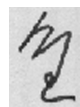
を  と書いているので、「当」のくずし字であることは明らかである。

なお、「た」については、日蓮の真筆上に多数の相違する「字形」を見ることができ、特に「かなるび」として振られる「た」は皆違っている。これは真蹟に「かなるび」を振ったのは特定の人、例えば日興というような推測を否定する証拠ともなる。以下にその字形の相違を掲しておく(御書名はその真蹟に振られた「かなるび」から抽出した「た」であることを示している)。

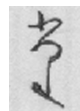
筆跡鑑定の上でこの「た」の字形は有力な判断材料となることを指摘しておきたい。なお日蓮真蹟における「た」は字形を「ぢ」と表記するが、その字母が「当」なのか「堂」なのかあるいは「多」なのか、即断しがたい問題がある。筆者は「堂」と考えているが管見の限り同時代の古文書に日蓮のような「ぢ」を書いているものはない。そういう意味で日蓮の「ぢ」は破格といわざるを得ない。なお日蓮は「た」(字源・太)と書かないし、「じ」(字源・多)と書くのは稀である。



日蓮真筆



日興要文集



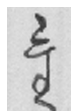
日興写本



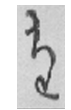
下山御消息



三三藏祈雨事



兄弟抄



南条殿御返事



上野殿御返事



兵衛志殿御返事



上野殿母尼御前御返事

(4)

写真で取り上げた「まいらせ」と「おほ」はいずれも「佐渡国法花講衆御返事」（日興上人全集 五六四―五六五頁）の文字である。この文書の筆跡は日興の標準的字形と比較すると逸脱していると言わざるを得ない。実際ここにしか現われない字体・字形が多いのである。字体では「ほ」（つ）・「ほ」（ほ）・「ほ」（ま）の三字である。「ほ」はこの文書のみで使用であり、「ほ」は三箇所で見られるが、字形は現代仮名の「ほ」のように書かれており「ほ」とはつきり読み取れる。そういう「ほ」はこの文書だけにしか現われない。「ほ」も三箇所の使用であるが、他の日興文書では「ほ」はない。字形では「おほしめされ」、「おほく」の始めの「おほ」の字形、「まいらせ」の字形、「え」（た）の字形がいずれも破格である。そもそも「た」は字母が「堂」と「多」と相違している。字形であるので写真を並べて比較する。（写真下の数字は『日興上人全集の頁』を示す）

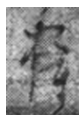
「佐渡国法花講衆御返事」

「日興の標準的字形」

「おほ」



565



565



428

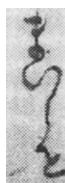


516

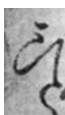


530

「まいらせ」



564



512



513



524

「そ」(た)



564



417



427



516

筆者の本稿で立てた仮説、青・壮年期の文字↓「日興写本」、晩年期の文字↓『日興上人全集』に収められる写真版の「日興消息」と日興の覚え書きである「法門要文」、「玄義集要文」とすると、本書は青・壮年期の文字としなければならぬ。しかし「佐渡国法花講衆御返事」の日付は元亨三年（一三三三年）六月二十二日」と明示されているから日興の晩年期に当たる。したがって「佐渡国法花講衆御返事」を日興筆から外せば「まいらせ」と「おほ」については例外扱いする必要がなくなる。更考。

- (5) 「曾祢殿御返事」（『日興上人全書』一九九頁）と「与さへの四郎書」（同二二七頁）にも「日興写本」と同じ字形の「聖」があるが、「まいらせ」の筆致が日興と著しく相違するので一覧からはずした。
- (6) 「弟子分本尊目録」は『日蓮宗宗学全書』二卷一一二頁、『日興上人全集』一一二頁、『日蓮正宗歴代法主全書』一卷八九頁などに所収
- (7) 日興の重須移住、永仁六年説については『日蓮宗事典』の「本門寺（北山）」の項による。（同七一五頁）
- (8) 昭定目次四頁には「日目写本」の記述はないが、『昭和新定 日蓮大聖人御書』『平成新編 日蓮大聖人御書』など大石寺系の御書集では「日目写本」とし、宮城の柳目妙教寺蔵としている。
- (9) 『日興上人 日目上人正伝』（大石寺 一九八二年）二二二頁
- (10) 『日興上人全集』五二九頁

（こばやしまさひろ・主任研究員）

# A Study about Nikko's Transcriptions of Nichiren's Own Handwriting

Masahiro Kobayashi

Nikko was one of Nichiren's representative disciples. He transcribed 31 letters of Nichiren's own handwriting. They are owned by Taiseki-ji temple. This treatise is a research about these transcriptions. I compared Nikko's own handwritings and these transcriptions.

At first I thought two types of texts were written by different persons in respect of the form of the character. If these Nikko's transcriptions are not Nikko's own, a commonly accepted theory will be overturn. Therefore, I analyzed cautiously Nikko's letters.

As a final result, I concluded these Nikko's transcriptions were written by Nikko in his youth.